



大工の技術をフルに生かした重厚感のある空間づくりも得意だ



には、新住協に入会。高性能な家づくりに取り組む県内外の仲間（会員）の工務店の現場を見せてもらうなどしながら、時に教えを乞い、自分なりに学びを深め、実践を繰り返した。「同じ志を持つ仲間との交流は非常に刺激になり、『自分もやるぞ』とモチベーションが高まる」と宮崎さんは語る。

地元の暮らしと家計を劇的に変える

暖かい家を提供するようになり、改めて生まれ育った故郷で「住宅の暖かさ」が持つ価値の重要性を思い知らされた。家を引き渡したオーナー家族は、宮崎さんが驚いてしまうほど、暖かい家を喜んでくれ、感謝してくれるという。そんな家族の姿を見て、声を聞きながら、宮崎さんは「ああ、みんなそもそも『家は寒いものだ』と思っているから、『暖かい家にしてほしい』と注文されなかったのか」と愕然とした。「暖かい家が、本当はこんなにも求められていて、こんなにも喜ばれるなんて」と気づいた今は、「地域の人たちに快適に暮らしてもらうために、言われなくとも暖かい家にしよう」と使命感に燃えている。

宮崎建築がつくる住宅の断熱性能

は、HEAT20・G2、付加断熱+トリップルガラス樹脂サッシを標準的な仕様とし、予算的な都合がある場合でもG1は上回る。宮崎さんが自ら構造計算を行う耐震性については、等級2以上を必須としながら等級3を提案。暖房は床下エアコン1台、冷房は2階のホールや吹き抜けに設置する壁掛けエアコン1台で、家全体を賄うのがスタンダードな形で、換気は熱交換式（ダクト式）を採用する。年間の冷暖房費（電気代）は6～7万円程度。古く大きな農家住宅も数多く残る地域で、「冬の間、灯油にプロパンガスにエアコンも加えて月に数万円というものすごい額の暖房費を払っている」世帯にすれば、快適さだけでなく家計も劇的に変わることになる。

「あったかいけどダサイという家は嫌」と話す宮崎さんが近年、力を注ぐのがデザイン面のレベルアップだ。素材などについては以前から、外壁はサイディングを用いずに木（板）・左官・金属、室内は床に無垢フローリング、壁に珪藻土クロスなど、建具は既製品は使わずにキッチンや棚などの家具も造作する、といったこだわりを持ってやってきた。

最近では、自社の住宅が醸し出す世



「あったかい家」が雪の多い地域で家族の幸せな暮らしを支える



日射など自然のエネルギーを有効活用できるパッシブデザインを採用

家族とともに地域にあった暮らしを楽しめる家をつくる



耕作放棄地と一緒に買い取った農作業小屋をリノベーションした事務所

古い農家住宅を生まれ変わらせたリノベーションの事例。地元の人たちの暮らしと家計が劇的に変わる。使命感を持って取り組んでいる

界観をさらに魅力的なものにしたいと、若手の設計士とコラボする案件を増やしている。宮崎さんは「設計（プラン）そのものも確かに素晴らしい参考になるが、一番勉強になるのは設計士が語る言葉。たとえば『なぜ、そこに開口部（窓）を設けるのか』という一つ一つの言葉からも、建築の奥深さを知ることができる」と話す。コラボによって得られる知識やスキルを自らの設計力やデザイン力の向上に役立てながら、自社が手掛ける住宅に今まで以上に「建築的な厚み」を加えていきたい考えだ。

高い基本性能は当たり前 “無言の信頼”に応える

宮崎さんは地元の隣の新発田市内の高校を卒業後、県産材を用いた大工による家づくりで知られる重川木材店（新潟市）に入社し、大工としてキャリアをスタートした。2年間の寮生活を含む同社での4年間の修業を通じて、墨付け・手刻みといった伝統の大工の技、現場の整理整頓やマナー、洗練されたデザインと納まり（ディテール）、当時県内で先駆的に取り組んでいた高断熱・高気密の知識・技術など全ての基礎を学んだ。「誇り高い大工のあるべき姿を知ることができたのは、いまも

自分の大切な財産になっている」と宮崎さんは語る。

四代続く大工が営む地場工務店には、暖かく快適な高性能な住宅を手掛けていることなど知らずに、地元のつながりだけで「頼むよ」とやって来る顧客も少なくない。それだけに宮崎さんは「だからこそうちには、高い基本性能を備え、快適に暮らすことができ、長く愛される住宅を提供することで、その“無言の信頼”に応える義務がある」と気持ちを引き締める。今後は、新築よりも改修（リノベーション）を主体的に手掛けていきたいという宮崎さんの「もしも地元の人たちが、うちのことを知らずに、ハウスメーカー やリフォーム屋さんに改修を頼んでしまったら、本当に暖かくて快適な暮らしを手に入れられないかもしれない」との言葉にも、地場工務店のプライドがにじむ。

無我夢中で、あったかい家づくりに取り組んできた。一緒に仕事をする妻の康子さんと、家庭では3人の子ども（中3長女・中1長男・小1二男）を育てる。『大工さんみたいにかっこよくあたたかくそして人に気に入られる家を作ってくれたのまれたいです』。長男が、小学生のときの宿題で書いた「10年後の自分」に宛てた手紙だ。い

Writer's Note
ライターズノート

坊主頭が似合う宮崎さんは「阿賀野の一休さん（アニメの方）だ」。新潟県内の住宅業界関係者らが楽しく学ぶ「住学（すがく）」のメンバーは、愛を込めてそう呼ぶ。アニメの一休さんは得意のトンチで町の人たちの困りごとを解決、阿賀野の一休さんは「あったかい家」で地域の人を幸せにする。重川木材店で大工の魂を、新住協で理論を、県内の有力工務店や設計事務所などの仕事に携わるなかで実践的な技術を学び、宮崎さんの今がある。たくさんの良い工務店の影響から、新たな良い工務店が生まれ、良い家が広がっていく。やっぱり工務店はサイコーだ！